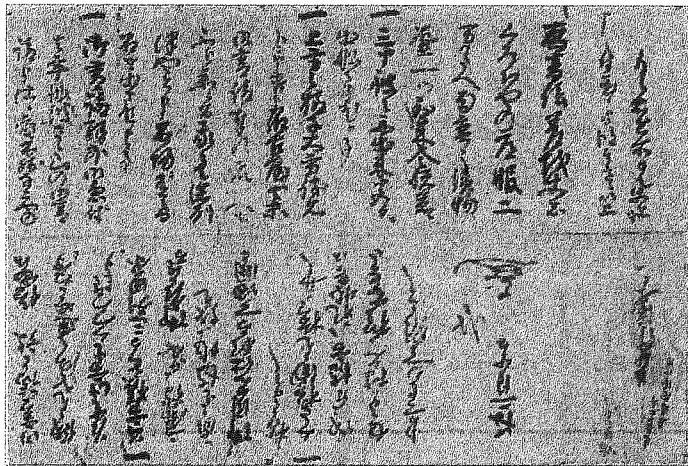


## 細川家・松井家と公儀普請

江戸幕府が全国の大名を動員して直轄の城を築城、修理させた公儀普請(御手伝普請、天下普請)。参加した大名たちは、石垣に使用する石の切り出しから運び出し、積み込みまで自らの負担で行わなければなりません。幕府が威信をかけ最先端の技術を駆使して公儀普請を実施する中、後に八代城主となる細川忠興やその息子・忠利、その家臣である松井家も手腕を発揮します。この展示では、慶長15年(1610)の名古屋城普請、慶長19年(1614)の江戸城普請、元和6年(1620)~寛永8年(1631)にかけて行われた大坂城普請と細川忠興、忠利、そして松井家との関わりについて、松井家に伝わる古文書6点から紹介します。

### ①細川忠興書状 松井康之宛 江戸時代前期 慶長15年(1610)2月10日 松井文庫所蔵

#### 公儀普請に対する大名たちの不満を伝える忠興の書状

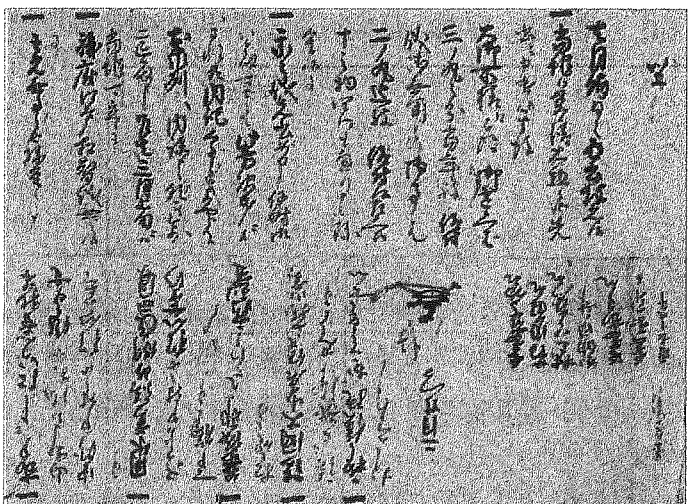


慶長15年(1610)、大御所徳川家康は9男義直のために、諸大名へ名古屋城の築城を命じました。この書状は、この動員を受けた豊前小倉藩主の細川忠興が家臣の松井康之へ宛てたもの。忠興は普請の準備のために美濃国津屋(現在の岐阜県海津市)で普請に使用する石を切り出していると伝えています。また、この普請には昨年、丹波篠山城の公儀普請に参加した大名たちへも動員の命があり、急なことでみな迷惑と言っていると記されています。公儀普請では、参加する大名家に使用する石や人手の準備が求められ、度重なる動員は大きな負担となっていたことがわかります。

### ②細川忠興書状

三淵重政、藪正照、加納曲斎、松井興長、沼田延元宛 江戸時代前期 慶長19年(1614)2月21日 松井文庫所蔵

#### 江戸城三の丸の普請は免除される

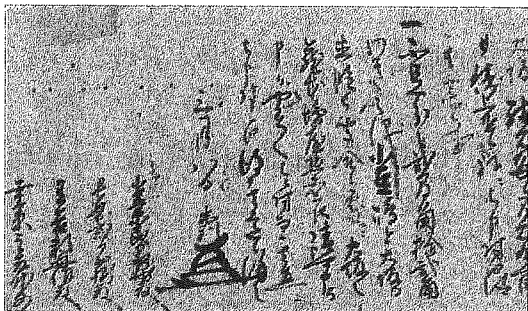


慶長19年(1614)正月から大規模な江戸城普請が開始されました。本史料は、豊前小倉藩主の細川忠興が松井興長たち家臣へ宛てた書状。書状によると、普請が大がかりであることから、大御所・徳川家康より三の丸の普請は不要で、二の丸までを実施する旨を受けています。忠興は、三の丸の普請がなくなったことにより、任されていた普請場10か所のうち4か所も減りありがたいことだと記しています。

③細川忠利書状 小笠原長元、松井興長、有吉英貴、桑原主殿助宛

江戸時代前期 寛永元年（1622）3月8日 松井文庫所蔵

小豆島と大坂で石の値段を比べ安い方で調達



豊前小倉藩主の細川忠利が総奉行の松井興長ら家臣に宛てた書状で、大坂城普請に向けた準備の様子などが記されています。大坂城の石垣は100万個にもおよぶ巨石を使用しており、これらの石は小豆島をはじめとして各地から切り出され大坂まで運ばれました。この書状には、石の値段について、小豆島と大坂で値段を比べた結果、安い大坂の方で石を調達することが記されています。

④細川忠興書状 松井興長宛 江戸時代前期 元和6年（1620）3月1日 松井文庫所蔵

忠興、高石垣の築造を任される

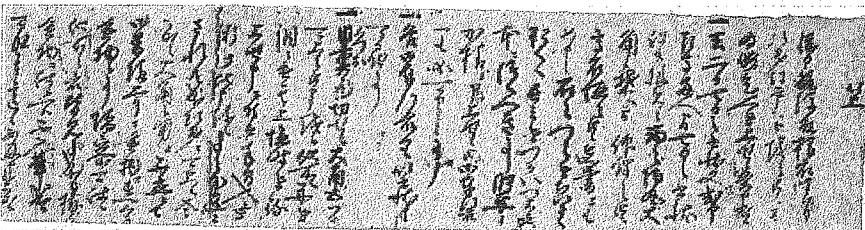


豊前小倉藩主の細川忠興が家臣の松井興長に宛てた書状。元和6年3月1日から大坂城普請が始まると、忠興は早速、江戸幕府の渡辺勝から19間（約34メートル）の高石垣の築造があることを聞き、総奉行を務める興長へ急ぎ石の準備をするよう命じています。通常の石垣は、高さ10メートル程ですが、高石垣は高さ20メートルを超える巨大な石垣で、築造するには高い技術が必要とされました。

⑤細川忠興書状

三淵重政、松井興長、有吉英貴、牧興相宛 江戸時代前期 元和6年（1620）4月18日 松井文庫所蔵

忠興、普請奉行たちへ石垣の積み方を指導



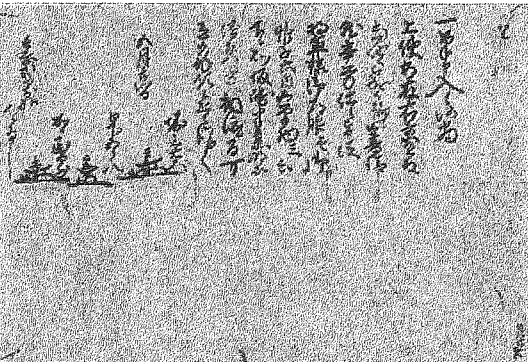
元和6年（1620）の大坂城普請の際に、豊前小倉藩主の細川忠興が松井興長たち家臣へ宛てた書状。細川家はこの普請で大坂城西の丸の高石垣の築造を任せられます。

崩れない石垣を造るために最も重要な部分が角（隅角部）です。この書状によると、忠興は高石垣の隅角部の積み方について、石の正面は小さく奥へ長いものを使用し、強く丈夫であることを第一に築くよう指示を出しています。忠興の石垣築造に関する知見の高さがうかがえます。

⑥加々爪忠澄外2名連署状

松井興長宛 江戸時代前期 寛永元年（1624）5月28日 松井文庫所蔵

総奉行の興長、将軍からねぎらいの品を拝領



加々爪忠澄が松井興長に宛てた書状です。加々爪忠澄は、幕臣で大坂城普請の際に幕府の御使番を務めた人物。この書状では、総奉行を務めた興長をねぎらい、将軍・徳川家光から道服や帷子などを拝領したことが記されています。

興長は、寛永13年（1636）の江戸城普請の際にも総奉行として尽力し、将軍から葵紋が刺繍された緋色と黒色の段替りの陣羽織を拝領しています。